

【翻訳】ソルブの民話3（パウル・ネド編）

著者	大野 寿子
著者別名	ONO Hisako, OHNO Hisako
雑誌名	東ドイツ文学
巻	9
ページ	5-29
発行年	2010-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011386/



ソルブの民話 (三)

第一章 動物メルヒエン (続き)

- 一四 (a) クモとハエ、ネコとネズミの敵対関係は
どこからきたか
(b) イヌとネコとネズミの敵対関係
- 一五 (a) コウノトリとミンサザイとフクロウ
(b) ミンサザイ
- 一六 四足で歩くもの (動物) と羽で飛ぶもの (鳥)
との戦い
- 一七 (a) 雄ウシとミンサザイ
(b) ミンサザイとクマ
- 一八 キツネもやっぱり騙される
- 一九 足の速いカエル
- 二〇 子どもとヘビの王さま
- 二一 痛い目にあうものもいれば、嘲るものもいる

一四 (a) クモとハエ、ネコとネズミの敵対関係は
どこからきたか

むかしむかし、一匹のハエが一粒の黍を見つけ、
大海原を越えて運ぼうとした。しかし、その黍粒
はハエには重すぎた。するとクモがハエのために
架け橋を紡いだ。その上をハエが渡って黍粒を農
夫に渡した。黍のお礼に農夫は、ハエとクモと彼
らの子孫に、隠居後の居宅を約束した。すべてが
書き留められ署名された。

ハエとクモは、その契約をどこに保管すべきか
わからなかった。ハエはネコに尋ねようと助言し
た。というのも、ネコは家中でよく知られていた
からだ。ネコは、梁の下にその文書を隠せばいい

パウル・ネド 編
大野 寿子 訳

と助言した。

しばらくして新しい主人がやってきて、ハエとクモを家の外へと追い立てはじめた。そこで二匹は自分たちの権利を、契約書によって証明しようとした。ネコもその後に続いたが、何も見つけることができなかった。なぜならネズミが、契約書をかじり尽くしてしまっていたからだ。クモはハエに腹を立てた。というのも、ネコに教えを請うよう助言したのがハエだったからだ。ネコはというと、ネズミたちを追いかけ回し、腹の中の契約書を見つけて出そうとした。しかし契約書はいまだ見つかつてはいない。そんなわけでネコは、今日なおむなしくネズミを追いかけ、契約書を探し続けているのである。

(『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、一八七二年、一八七頁より。)

一四 (b) イヌとネコとネズミの敵対関係

むかしむかし、イヌが大きな権力を持っていた。

ある契約書の中で、イヌが、そのイヌを滞在させる者たちから、肉を毎日一ポンドもらえるということが保証されていた。だから人々はよく、イヌの取り分の肉を、ちよつとだけちよるまかして渡すようにしたものだったが、そういう場合には、

イヌは契約書を呈示した。すると人々はイヌのために、不足分の肉をしぶしぶながら補充しなければならなかった。ところが、何度も何度も手で触れたため、契約書がすっかり脂まみれになってしまったのだ。イヌは、契約書が最終的に読めなくなるのを恐れ、ネコに預けた。ネコは、契約書を屋根裏部屋に運び、垂木の陰に隠した。ところが、契約書がとても脂まみれだったので、その匂いをネズミたちが嗅ぎつけ、飛びつき、すっかりかじり尽くしてしまった。

それから後、イヌがまた、自分の分け前の肉の一部をちよるまかされた。イヌは苦情をいい、自分の権利である取り分を要求した。人々はイヌにも、毎日一ポンドの肉をもらう権利があるというのなら、その書状を見せてほしいといった。イヌ

はネコのところへ行き、ネコに契約書を要求した。

ネコは屋根裏部屋へと急いだ。しかし、ネコが書状を取ろうとしたとき、ネズミたちががしでかした、とんでもない災いを目の当たりにした。ネコには、起こった事実をありのままイヌに話す以外に、道は残されていなかった。こんなわけでイヌは、自分の権利を証明することが、もうできなくなってしまったのだ。人々はイヌに、肉は今後も渡さないといった。イヌは激しい怒りがこみ上げてきて、憤激のあまりネコめがけて突進した。ネコは逃げるしかなく、それ以来、ネズミに対する復讐の念を露にした。こんな訳で、イヌはネコを憎み、ネコはネズミと反目するようになったのだ。

(『ヴェントの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』、四二二頁より。)

一五 (a) コウノトリとミソサザイとフクロウ

むかしむかし、コウノトリとミソサザイが鳥たちの王座を争ったが、折り合いをつけることがで

きなかった。そこで、賭けがなされた。空中の最も高いところへ飛翔し、それから大地の最も深いところまで飛び込むことができるものが、鳥の王になるというのだ。コウノトリは舞い上がった。ミソサザイはというと、コウノトリの尾っぽに乗った。そしてコウノトリが、もうこれ以上高くは飛べないという程高く飛翔したとき、ミソサザイはコウノトリの尾っぽから飛び出し、コウノトリの上方へと飛び上がってこう叫んだ。「ほら見たかい、コウノトリくん。僕の方が君より何エレ(訳注)も上にいるじゃないか！」

これを聞いてコウノトリはひどく怒った。さて、二羽が再び降下したとき、コウノトリは激しく体を打ちつけたので、息もつけずに死んでしまった。ところが、ミソサザイはずる賢かったので、上空から地上を見下ろしてネズミの巣穴の位置を確認し、その中へと飛び込んだ。ミソサザイのそのやり方が、鳥たちを怒らせた。というのも、ミソサザイがコウノトリを騙した結果、他の鳥たちが皆、ミソサザイのような小さな鳥に従わ

なければならなくなったからだ。だから鳥たちは、ネズミの巣穴の前に見張り役のフクロウを置き、ミソサザイがネズミの巣穴から出てくるところを捕まえようとした。しかし間もなく、フクロウが眠り込んでしまったため、ミソサザイは何の危険もなく穴から這い出すことができた。だから鳥たちは、今日なおフクロウを恨んでいるのだ。

(『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、一八七七年、六二頁より。)

(訳注) エレⅡ昔の尺度。一エレが五〇センチから八〇センチ程。

一五 (b) ミソサザイ

世界の創造の後、鳥たちが自分たちの王さまを選びたいと思った。大きな鳥たちはコウノトリを王に選び、小さな鳥たちはミソサザイを選んだ。鳥全体の意見は一致せず、空中最も高く飛翔するものが王になるということになった。さて、コウ

ノトリは空高く舞い上がったが、ミソサザイはというとコウノトリの尾っぽに腰掛けていた。コウノトリが飛ぶのに疲れたときに、ミソサザイが、もう一羽ばたき高く飛んだのだ。それを知った大きな鳥たちは、今度は、地中最も深く潜れるものが王になるべきだといいだした。それを受けて、コウノトリとミソサザイは急降下した。コウノトリはぬかるみの中へと突進し、その結果死んでしまった。ところがミソサザイは、ネズミの巣穴の中へと突進したので、コウノトリより深く潜ることができた。そこで、ミソサザイが巣穴から出てきて王座につくことができないように、夜しか目の見えないフクロウが見張り役をすることになった。ところがフクロウは眠り込んでしまったため、ミソサザイは穴から這い出せた。この時以来フクロウは、日中には姿を見せなくなってしまった。というのも、もしフクロウがやってこようものなら、すべての鳥たちがフクロウを追いかけるようになったからだ。

(『シュプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風

習』、八一頁より。)

一六 四足で歩くもの(動物)と羽で飛ぶもの(鳥)との戦い

鳥(羽で飛ぶもの)と四足動物(四足で歩くもの)とが互いに宣戦布告をした。誰が命令を下すべきか、最も賢く戦争をするにはどうするべきかが、双方の陣営で協議された。鳥たちは、四足動物たちが何を話し合っているのかを盗聴すべく、カ(蚊)をスパイとして送り込んだ。四足動物たちは、森の中の空き地で協議を行なっていて、カは、葉の陰で聞き耳を立てた。

そこではキツネが、指揮官に選ばれるのに骨を折っていた。キツネはこういった。

「私には長くてふさふさとした尻尾がある。それを高く掲げれば、各々から見える最高の旗となり、みんながそれに従うことができるだろう。」

そして、買収やオオカミとクマの助けにより、キツネは高位を手に入れた。

さて、指揮官であり旗手でもあるキツネがこう命令した。

「オオカミ、私の右につけ。クマ、私の左につけ。皆のもの、私の尻尾をしかと見よ。私が尻尾を高く掲げる限り、戦果すこぶる豊富である。だかもし尻尾が下がるものなら、芳しくないものと心得よ。」

カは、自分の野営地にいる鳥たちにすべてを報告した。すると、ワシがこう命令した。

「カの一族よ、さあ皆先陣を切って飛び立て。そしてオオカミとクマの目を刺して潰してしまえ。モンズズメバチよ、お前はキツネの尻尾に止まり、渾身の力を込めて身の部分を突き刺すのだ。」

さて、双方の陣営から勇敢にも彼らは戦闘へと赴いた。決戦へと向かう途上で、モンズズメバチとカが首尾よく任務を遂行した。モンズズメバチは、キツネの尻尾の根元を刺した。キツネがこういった。

「あああ、オオカミよ、燃えるように熱い弾が、今私に当たったようである。」

「よろめくな。旗をまつすぐ掲げている」とオオカミはいった。

「ああ、クマよ」とキツネがまた口を開いた。「灼熱の弾の二発目が、私に当たってしまったようである。非常に痛い。名誉職とはなんて骨の折れるものなのか。君にはわからないだろう！」

「尻尾を下ろすな」とクマがいった。「でなきや俺たちが負けてしまう。オオカミと俺が、さんざん抗戦しなきやならなくなるじゃないか。」

さて、モンズズメバチが、キツネの尻尾の根元を引っ切りなしに刺しはじめたので、キツネは金切り声を上げこういった。

「ああ、燃えるような弾が、私の上に大量投下されたようである！私の名誉職を君たちの手に渡そう。皆のために血だらけになってしまおうなど、私にはもう耐えられない！」

キツネは逃げ出し、四足動物が敗者となった。

『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、一八
九〇年、八〇頁より。)

た。それが功を奏し、雄ウシはもう二度と灌木には近づかなくなった。
『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、一八
九〇年、六三頁より。)

一七 (b) ミソサザイとクマ

むかしむかし、クマがミソサザイの巣がある穴へとやってきた。巣の中に雛たちがいるのを見たクマは、その雛たちを放り出そうとした。しかしミソサザイが巢に舞い降りてきて、クマを怒鳴りつけ叫んだ。

「このクマめ、来い！お前の体のあばら骨全部踏み潰してやるから！」

クマは怖くなって引き上げた。

『ヴェントの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』
四二三頁より。)

一八 キツネもやっぱり騙される

一七 (a) 雄ウシとミソサザイ

ウシ飼いの女のミーテスが、雌ウシを数頭荒野の牧草地へと追い立てた。雄ウシもいっしょだった。しかし荒野には、低い灌木が生えており、その中にミソサザイが巣をつくり、雛がいた。我々の雄ウシがそれに気づいた。何度も雄ウシは灌木のあるところへ行き、ミソサザイの雛を怖がらせようと、角を灌木の中に突き刺した。ミソサザイの親が巣に戻って来たとき、雛たちがそのことを話した。

「待ってなさい。そんなことが私がやめさせてあげます。角でつくなんてこと、永遠に忘れさせてあげるから。」こういって親鳥は雛を慰めた。

次の日、ミソサザイの親は巣に留まった。例の雄ウシがまた灌木をつつきにやって来ると、ミソサザイは雄ウシの耳の中へと飛び込み、力のかぎりその中を飛び回り、つつき、鳴きわめいた。雄ウシは狂ったように荒地を走り回り、大声で啼いたため、雌ウシがみんな一斉に走り回ってしまった。

むかしむかし、食欲で甘いもの好きなキツネが、ヴォオネツツの屋敷の側を通りかかり、そこで若鶏の群れがコッココッコと鳴いているのを聞いた。キツネはこれといって空腹でもなかったのだが、ホカホカの焼き鳥のことを考えると、口の中が唾だらけになった。オンドリが一羽、コケコッコと鳴きながら屋敷から出てくるまで、キツネは長いこと待ち伏せした。シュワツ！キツネはオンドリを捕まえて喜び勇んで森へと駆けた。ここでオンドリは死ぬほどの恐怖のなかで唸り罵りはじめた。

「あなたは、天に召されたあのお母さまキツネとは違いますね。あなたのお母さまは、若鶏をまづ木の切り株の上に座らせて、神さまに感謝の祈りを捧げられたものでございますよ。」

このことが我らがキツネの心に響いた。キツネは、愛する母親の誉れを共にしようとしたのだ。

「僕だって心からの祈りを捧げることができなさ」と、キツネは自分自身に言い聞かせた。キツネはそのオンドリを切り株の上に座らせ、祈りは

じめた。ところがその瞬間、オンドリはフワフワツと羽ばたいて、すぐ側のマツの木に飛び乗った。驚いたキツネが、過ちに気づくか気づかないかのうちに、オンドリはキツネを嘲り、甲高く鳴いた。「コケッココー。なんと賢いおキツネさま！コケッココー！」

というわけで騙されたキツネは、悲しくなり腹を立てて戻って行った。

『メルヒエンと説話―「セルボウカ」記念号』第三卷、二三頁より。』

一九 足の速いカエル

むかしむかし、キツネがある池へと水を飲みに行った。そこには大きなカエルが座っており、キツネにガアガアがなりたてた。キツネはこういった。

「失せろ、でなきやおまえを呑み込んでやるぞ。」

カエルがそれに対してこういった。

「そんなにうぬぼれるんじゃないよ。僕は君より

足が速いんだぜ。」

しかしキツネはカエルをあざ笑った。いやそれどころか、カエルが自分の敏捷性について何度も語るの、キツネはこういった。

「だったら町まで競走しようじゃないか。そこで再び落ち合おう。」

そしてキツネはきびすを返した。カエルはキツネの尻尾にすばやく飛び乗った。さて、キツネが町の門の所までやってくると、後を振り返り、カエルがどこにもいないことを確かめようとした。そのときカエルが、キツネの尻尾からすばやく飛び降りた。キツネは、背後にカエルがいらないことを確かめると、町へと完全に足を踏み入れるために前方を向いた。そのときカエルが、キツネの前方で叫びはじめた。

「君もようやくついたようだね。僕はちよつと帰るところだったよ。だって君が全然来ないと思っただからね。」

『高地ラウジッツと低地ラウジッツのソルブ民話』第二卷、一六〇頁、第三番より。』

二〇 子どもとヘビの王さま

むかしむかし、一人の女がいた。その女には小さな子どもがいた。その母親は、乳搾りに出かけたとき、部屋に残る子どものために、床にミルクを置き、パンをその中にちぎって浸しておいた。すると、一匹のネコがやってきてミルクをなめるのだが、パンくずは食べようとはしないのだ。こゝうようなことを、子どもが母親にいつも話していた。ある日、母親はまたミルクを置き、どんなネコが来るのだろうとこつこつ観察していた。すると、ヘビの王さまがやって来てミルクをなめたのだ。そして子どもは、ヘビの頭をスプーンで叩きながらこういった。

「ほら、パンくずもお食べ。ミルクばかりピチヤピチヤするんじゃないよ！」

母親は、ヘビがその子になにかするのではないかと恐れたが、ヘビは、ミルクだけ飲んで帰っていった。それから毎日ヘビはやって来た。そんな

日々が一年ほど続いた。するとヘビは王冠を外して子どもに渡した。それからその子は、とても金持ちになったということだ。他にも、母親がヘビの使ったミルク鉢の下に白いハンカチを置くと、ヘビが頭の王冠を外したという話もある。

『シュプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風習』九九頁より。』

二一 痛い目にあうものもいれば、嘲るものもある

炭と泡と藁の仲良し三人組が、見知らぬ国へと赴いた。その旅の途中で三人は、水がいつぱい溜まった馬の足跡のところへとやって来て、その大海原をどうやって越えたらいいのかと、長いこと思い悩んだ。ようやく三人は、藁が水溜りの上に横たわり、他の二人がその上を歩いて渡ることにした。まず、炭が渡りはじめた。しかし、炭が藁の橋の真ん中ほどにやってきたとき、ちよつと立ち止まって辺りを見回したくなった。ところがそ

の際に、炭が藁を燃やし尽くしてしまい、二人とも溺れてしまった。その一部始終を滑稽に思った泡は、大笑いをはじめ、結局弾けて消えてしまった。

そんな様子を眺めていた小石がこういった。

「ああ、なんてことだ。痛い目にあうものもいれば、嘲るものもいる！とはいえ時として、嘲るものも痛い目にあうということか。」

『高地ラウジッツと低地ラウジッツのソルブ民謡』
第二巻、一六〇頁、第四番より。

【パウル・ネドによる注釈】

一四 (a) クモとハエ、ネコとネズミの敵対関係はどこからきたか

このメルヒェンは、H・ドウチュエマン（ヴルシンスキー）が伝え、ナウカ『伝説とメルヒェンと物語—ソルブ民族の宝』（以下、ナウカ前掲書と略記）、五頁、第五番に復刻されている。

(b) イヌとネコとネズミの敵対関係

フェッケンシュテット『ヴェントの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』（以下、フェッケンシュテット前掲書と略記）によるこのメルヒェンは、ブラーニッツに由来している。

失われた特権という基本モテイーフを持つ一四番の (a) (b) 双方のテキストは、ボルテ／ポリーフカ『グリム兄弟『子供と家庭のためのメルヒェン集』注釈書』（以下、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』と略記）第三巻の五五三頁に書き留められている。

ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第三巻の五四二頁から五五五頁では、膨大な注釈のなかで、グリム兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』の二二二番（以下、KHM222 と略記）「なぜイヌはネコ、ネコはネズミと仲が悪いのか」と KHM223 「なぜイヌは互いに嗅ぎまわるのか」の二つのメルヒェ

ンを取り扱っている。^{（訳注）} 我々ソルブの一四 (a) のテキストは KHM222 に属しているのだが、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』で引き合いに出されている大量の文献には類を見ない、特権というものに対する独自の導入部と理由付けを有している。

KHM222 とは、我々ソルブの一四 (b) テキストも類話であり、その広範な伝播をボルテ／ポリーフカ『注釈書』が、膨大な量の文献でもって証明している。このテキストには、特権の許可理由は記されていない。

互いに嗅ぎ合うイヌというモテイーフを有した KHM223 に対応する、ソルブの伝承におけるたった一つの、しかもとても短いテキストが、W・フォン・シューレンブルク『シュプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風習』（以下、シューレンブルク前掲書「シュプレー」と略記）の八〇頁に記されている（「消えたイヌ」）。ヘルタ・ヴィチャツェッツによって報告された、ソルブの類話の最新期テキスト「イヌとネコの敵対関係」については、『週刊新聞』一八四九年の二九四頁を参照され

たい。そのテキストによると、イヌたちが、ある城の忠実な見張りのために、毎日ライオンから肉とソーセージという賜物が与えられるという特権を持っていた。ところがそのイヌたちは、眠り込んでしまうネコたちに特権を預けたのである。

ポイケルト『シュレージエンの民俗』（以下、ポイケルト前掲書と略記）の三一頁、二三番「イヌ、ネコ、ネズミの敵対関係はなぜ発生したのか」と、三二頁、二四番「なぜイヌはネコに、ネコはイヌに腹を立てているのか」という、シュレージエンの二つのテキストも参照のこと。なお、スロヴァキアの類話は、ポリーフカによって裏付けられてはいない。ちなみに、クジジヤノフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』（以下、クジジヤノフスキー前掲書と略記）の第一巻七一には、ポーランドの一二のテキストが示されている。

（訳注） グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒェン集』（初版刊行一八二二年）の第七版決定版（一八五七年）には、「メルヒェン」が二〇一

話(通し番号 KHM1 から KHM200 まで)と「子どものための聖人伝」が一〇話(KHM201 から KHM210 まで)しか収録されていない。KHM211以降の話とは「こゝでは、ボルテノポリーフカの『注釈書』第三巻に収められた話のことである。『断片』として収録されているのが、KHM211 から KHM216 までの六話であり、さらに「グリム兄弟の遺稿からのメルヒェン」として、KHM217 から KHM225 までの九話が挙げられている。

一五 (a) コウノトリとミンサザイとフクロウ

E・ムツケにより、低地ラウジッツ(ニードー・ラウジッツ)から報告されている。

(b) ミンサザイ

このシュレーンブルクにより記録されたテキストは、同様に低地ラウジッツに由来する。

鳥の王選びのメルヒェンの双方の類話では、

KHM171「ミンサザイ(垣根の王さま)」とは違い、

コウノトリがワシに代わる役割を演じている。このことは、低地ラウジッツのようにコウノトリの多い地域においては容易に説明がつく。よく似たテキストが、フェッケンシュテット前掲書の四二四頁にも挙げられている。さらに、これら三つのテキストは、ボルテノポリーフカ『注釈書』第三巻、二八二頁に書き届けられている。

『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』の一八七七年一二二頁で、A・ドマシユクが、KHM171の簡素な再話である高地ソルブ語のテキスト「ワシとその他の鳥たちとの敵対関係はなぜ起こったのか」に言及している。『ソルブの花』、一九一二年、一九一三年の「ナイチンゲールがどうやって鳥の王になったのか」には、夜の歌い手合戦によって鳥の王が決定されるといった、かなり文学的な話が掲載されている。ルーマニアのメルヒェンには、ナイチンゲールが存在してはいるが、このナイチンゲール話をソルブの民話と見なすことは難しい。

ミンサザイのメルヒェンは、近隣地域におけるほとんど同じ多くのテキストにも集録されている。ボルテノポリーフカ『注釈書』第三巻、二八〇頁と二八一頁を参照のこと。ただシュレージエンに關してのみ、ポイケルトは用例を探し出していない。

J・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』(以下、ポリーフカ前掲書と略記)第五巻、一四七頁のスロヴァキアのメルヒェンは、KHM171に似ている。同様のことがポーランドの諸テキストにもいえる(クジャノフスキー前掲書、第一巻、七二頁)。

さらにデーノハルト『自然伝説』第四巻、一六一頁と、ヴィトルド・クリンガー『古典古代の文献における放浪者モテーフより』、一九二二年、第一巻、四・二二頁参照のこと。

一六 四足で歩くもの(動物)と羽で飛ぶもの(鳥)との戦い

四足動物と鳥の戦いという動物メルヒェンのこ

のテキストは、A・ザイラーが民衆の口伝えから書き留めた。E・ムツケがこれをザイラーの遺稿から刊行した。本来のモテーフだけに限られた、とても簡素だが生き生きとした具体的表現となっている。クマによってミンサザイの子どもが傷つけられるという、KHM102「ミンサザイとクマ」では枠物語形式で語られている戦いのための理由付けが、ここでは欠けている。このモテーフは、ソルブのメルヒェン文学においては独立した話として現れる(本書一七番参照)。我々ソルブのメルヒェンにおいては、キツネがあらさまに中核に置かれている。この威張った指揮官をおとしめることが、冗漫かつ具象的に描かれている。

我々ソルブの説話資料のために、さらにいくつかの資料が存在する。『週刊新聞』一八四三年、一八三頁では、クルシュヴィカによって報告されたテキストを、ザイラーが刊行している(「野心的であることなかれ」)。そのテキストでは、同様の素材が詳しく、しかも原因譚(縁起)的結末を伴って語られている。敗北に終わった戦いの後、キツ

ネは裁判にかけられ有罪判決を下される。キツネのせいで動物たちが恥をかかされたので、キツネはそれ以来、土の下に住まなければならず、日中外に出ることが許されなくなった。しかしキツネが夜間に会うものを、彼は殺してもよい。イヌたちが、特にキツネの見張りを依頼される。このテキストはまた、ヨルダン『最も美しいメルヒエン集』(以下、ヨルダン前掲書と略記)の五八頁にも収められており(「戦いの指揮官」、言語的には自由に、ナウカ前掲書、第一号の二〇頁、第一六番にも形作られている)。

近隣地域からの出典がある。メクレンブルクのメルヒエンとしては、バルチュの第一巻、五一六頁、第二三番「四足動物と鳥の戦い」、ポンメルンのメルヒエンとしては、ハースのリュエゲン島の伝説の第一六七番「クマとミソサザイ」、ヤーン「ボンメルンとリュエゲンの民間伝説」(以下、ヤーン前掲書と略記)の第五七四番「鳥と四足動物の戦い」がある。ポリーフカのスロヴァキアのメルヒエンや、クジジヤノフスキーのポーランドのメル

ヒエンの索引には、この手の説話素材は存在しない。

一七 (a) 雄ウシとミソサザイ

ヤクブ・ロレンツによって報告される。我々ソルブの説話素材は、KHM102「ミソサザイとクマ」の枠物語にも見出される。KHM102では、ミソサザイとクマとの諍いのくだりが、鳥と四足動物の戦争の原因とされている。鳥と四足動物との戦いについての話(本書第一六番参照)が、ソルブのメルヒエンにおいては別に存在しており、ミソサザイとクマのモテーフはモテーフで、独立したメルヒエンへと仕上がっている。クマの代わりにここでは、今日の生活においてはよりなじみとなった牡ウシが登場している。

(b) ミソサザイとクマ

ここで語られているエピソードには、クマのた

くらみの理由が語られてはならず、また、そこからメルヒエンの筋も展開されてはいない。これはおそらくメルヒエンの残部であり、KHM102「ミソサザイとクマ」の一モテーフの、いささか乏しい再話であろうと推測する方が、むしろ自然である。本書第一五番と第一六番の注釈も参照のこと。

一八 キツネもやっぱり騙される

このメルヒエンは、手書の『ソルブの花』(一八五三年、五四年)に記された本書二一番の話の傍らに、M・フルニクが記入したもので、最初に刊行されたのは、『週刊新聞のための月次付録』、一八五八年、一二頁であった。さらに、シェウチツク『メルヒエンと説話―「セルボウカ」記念号』の二三頁によって再版された。

この話は、欺かれるキツネあるいはオオカミという、広範に伝播しているモテーフ群に属しており、グリム兄弟『子どもと家庭のメルヒエン集』

においては、KHM86「キツネとガチョウ」がその代表である。これらのモテーフ群の中には、オンドリがキツネの心を動かし歌ったり祈ったりさせ、その間を利用して逃げ出すという、かなりの量をなす一グループが存在する。ボルテ/ポリーフカ『注釈書』第二巻、二〇七頁が、特に古い資料を収集している。

近隣地域からは、我々ソルブのモテーフに匹敵する資料は提出されていない。ポイケルト前掲書の一五頁の第一三番と、一七頁の第一四番「キツネはどうやって騙されたか」が、条件つきでここに属する。というのもこの双方のメルヒエンにおいて、一人の農夫がキツネを騙すからである。我々のソルブ地域には、この類話資料が乏しいことを考慮しつつ、すでに本書第一一番(注釈)で記した懸念を鑑みると、このメルヒエンがソルブの民間伝承なのかどうかという疑念は、むしろ的を射ているといえよう。

一九 足の速いカエル

シユマラーがこのメルヒエンをローサで書き留めた。ハウプトによって再版された伝説集『ラウジッツの伝説本』(以下、ハウプト前掲書と略記)第二卷、二二二頁、第三二二頁(キツネとカエル)ナウカ前掲書、七頁、第七番とプシエジェナツクの一九三一年の二三頁。

ボルテノポリーフカ『注釈書』の第三卷、三三五頁には、KHM187「ウサギとハリネズミ」の注釈において、このメルヒエンを参照するよう指示されている。我々はこちらで、キツネとカエルがパートナーであるという、動物の徒競走モチーフのバリエーションの一つを持っている。近隣地域の出典資料の中には、キツネとザリガニがパートナーとして登場する。そして、ブランデンブルクのメルヒエンには、ガンダー『低地ラウジッツの民間伝説』一八九四年、一二四頁、第三二四番「キツネとザリガニ」があり、ボンメルンのメルヒエンには『ボンメルン民俗学集成』第三卷、六五頁に「キツネとザリガニ」がある。また、ク

ジャンフスキー前掲書の第一卷、七九頁には、「キツネとザリガニ」という同様の八つのテキストを挙げている。

ウサギとハリネズミの徒競走のメルヒエンは、ソルブの文芸においても存在している。ヨルダン前掲書の五四頁「ハリネズミ」と、『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』、一八七一年、九二頁「ハリネズミ」である。両方の場合とも、KHM187のほとんど言語的に忠実な翻訳である。

ヴィルヘルム・グリムの『小論文集』第四卷、一八八七年、三六二頁が、我々ソルブのキツネとカエルのメルヒエンを、ドイツのウサギとハリネズミよりも素朴で(起源的で)あると見なしている。というのも、カエルと高慢なキツネの間の対立の方が、動物伝説のなかで副次的(下位的)役割が付随するハリネズミとウサギの対立よりも、いかにも真実らしいからである。

二〇 子どもとヘビの王さま

農婦と共に死ぬ。シユールンブルク前掲書(「シユプレー」、九六頁より)。

ヘビの王さまは寶石でできた高価な王冠を持っていて、それを貰い上げるためには、白い布の上にそれを置かなければならない。シユールンブルク前掲書(「シユプレー」、九六頁より)。

ヘビの肉を食べた者は、鳥の言葉を理解するようになる。シユールンブルク前掲書(「シユプレー」、九六頁より)。

ヘビは、人間にとって忠実で役に立つ連れ合いである。シユールンブルク前掲書(「シユプレー」、九七頁。フェッケンシユテット前掲書、四〇七頁、九番)。

ヘビたちは毎年三月にやってきて、祝宴を催し自分たちの王を選ぶ。シユールンブルク前掲書(「民族性」、四八頁。A・ラベナウ「ヴェント人のオリジナル・メルヒエン」、一一八頁(以下、ラベナウ前掲書と略記)。フェッケンシユテット前掲書、四〇二頁の一番、四〇四頁の五番)。

広範囲に伝播しているのは、リュベナウの王宮

ヘビのモティーフは、低地ラウジッツの文学には並外れて数が多いが、高地ラウジッツ(オーバー・ラウジッツ)においてはほとんど見られない。その際に重要と見なされるのは、特にシユプレー・ヴァルト地方にはヘビが頻出し、ときとしてそれが悩みの種となっていたということである。典拠諸資料はたいていの場合は、メルヒエン的ではなくむしろ伝説的な特徴を持つ。

ヘビは、子どもと一緒に一つの鉢からミルクを飲む。学術雑誌『ソルブの母』、一八七七年、九九頁。シユールンブルク『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』(以下、シユールンブルク前掲書(「民族性」と略記)、四八頁、四九頁。フェッケンシユテット前掲書、一三八頁、三〇番)。

一匹のヘビが、子どもと一緒に黍を食い尽くし、王冠を白い布の上に置く。フェッケンシユテット前掲書、四〇三頁の三番と四〇四頁の四番)。

フシユ、ヴシユ、ヴジョフニー・クラールという名の家畜としてのヘビたちが、家の地面の上で生活しており、牝ウシの乳を吸い、農夫あるいは

庭園に住むへびの伝説である。ある森林官がへびから王冠を盗み、馬に乗って逃げ去り、へびたちが、町の門のところまで森林官を追いかける。だからへびが、リーナーの町の紋章となつてゐるのだ。ビュッシングの週刊報告第三号(一八一七年)、三四二頁。クリステイアン・クルマン、『週刊新聞』、一八四三年、一八九頁。キューンの『シュプレーの森』、四三頁によればシュールンブルクとある。すなわち、シュールンブルク前掲書(「シュプレー」、九七頁参照のこと。フアーリシユ『リュベナウ年代記』、二八〇頁。ボルテ/ポリーフカ『注釈書』第二卷、四六四頁に再印刷されている。ハウプト前掲書、第一卷、七五頁、八二番。P・クンツェンドルフ『ブランデンブルク州の伝説』、一七五頁、一九〇番「リュベナウのへび」。

へびたちが、ブルクの宮廷山に埋蔵されている宝を守っている。シュールンブルク前掲書(「シュプレー」、九頁と二二三頁。フェッケンシュテット前掲書、二五頁、七七番。

へびたちが真珠の涙を流す。フェッケンシュテ

夢魔としてのへび。フェッケンシュテット前掲書、一三六頁、一九番。

罵つてばかりいる人プムポットがへびに変身する。シュールンブルク前掲書(「シュプレー」、四五頁。彼は四つ頭のへびに喰われる。フェッケンシュテット前掲書、九〇頁、一二番。

魔法にかけられへびの姿になつた王子。フェッケンシュテット前掲書、六二頁、六番。

へび魔法使い(へび巫術師)がへびを根絶するか、へびを焼き討ちにしてシュプレーの森から追い出す。シュールンブルク前掲書(「民族性」、四九頁。シュールンブルク前掲書(「シュプレー」、九八頁。ラベナウ前掲書、一一二頁。フェッケンシュテット前掲書、四〇六頁、八番。

相応して近隣地域からも数多くの資料が見つかる。A・エンゲリエンとW・ラーン『マルクルーブンランデンブルクの民衆のことば』、第一卷、七九頁「子どもとへび」。ヤーン前掲書、一六七番「家へび」と、一七〇番「家へびと牝ウシ」。ハウプト前掲書、第一卷、七八頁、八四番「へびの王さまと

ット前掲書、四〇二頁、二番。

へびが、授乳中の女の乳房に吸いつき、二度と放さない。へびを厄介払いするためのおとりとしては、ミルクまたは卵焼き(フライド・エッグ)が役立つ。シュールンブルク前掲書(「シュプレー」、九九頁。

へびたちが、自分たちの王冠を盗んだ二人の盗賊が逃げ登っている木を噛んでズタズタにしよるとするが無駄な骨折りとなり、その木の上で五日間互いに格闘する。フェッケンシュテット前掲書、四〇五頁、六番。

木の上のへびが子どもには何もしいないが大人を殺す。弾はへびに当たつて跳ね返る。へびは斧で斬殺される。フェッケンシュテット前掲書、四〇六頁、七番。

へびが眠っている人間の口の中へと這い入り、病を持ち去る。シュールンブルク前掲書(「シュプレー」、八一頁と二九八頁。フェッケンシュテット前掲書、一三八頁、二八番と二九番。学術雑誌「ソルプの母」、一八九七年、八二頁、二二一番。

王さまの森」。ヤーン前掲書、六〇二番「へびの王さまが王冠を盗まれる」。

スロヴァキアのメルヒエンには、へびの王さまのモティーフが散在している。ポリーフカ前掲書、第五卷、一二七頁。ポーランドのテキストには、おびき出されてしまふ、人間の中のへびというモティーフが見受けられるのみである。クジジヤノフスキー前掲書、第一卷、八二頁。

ボルテ/ポリーフカ『注釈書』第二卷、四六五頁では、KHM105「へびとスズガエルの話」の注釈において、フェッケンシュテット前掲書の四〇三頁―四〇六頁が参照指示されている。

二一 痛い目にあうものもいれば、嘲るものもいる

シュマラーはこのメルヒエンを手書の『ソルプ新聞』から引き継いだ。しかし直接ではなく、おそらくはA・ザイラーの手を通してであろう。ハウプトによって再版された伝説本の第二卷、二

○四頁の第三〇九番。『週刊新聞』、一八四三年二二頁、フルニクの読本 (Čítanka)、三頁。シェウチック前掲書、二〇頁 (J・ヴァウリツクによるもので教訓的な結末はない)。ナウカ前掲書、七頁、第八番 (ハウプトとシュマラーの『高地ラウジツツと低地ラウジツツのソルブ民謡』からの結末を伴っている)。ポルテ/ポリーフカ『注釈書』第一巻、一三六頁の KHM18 「藁と炭と空豆」についての注釈に記されている。

○ヴィチャスレーマンの遺稿のなかに、このメルヒエンへの詳細な諸々の注釈を、筆者 (パウ・ネド) が発見した。その注釈は、ザイラーの寓話についての、ヴィチャスレーマンの予備調査に由来するものであり、彼の記したザイラーについての論文 (選考論文) に、その簡潔な表出が見出される。手書きの注釈を、そのまま以下に引用する。

「メルヒエンのこのテキストは、ハウプトとシュマラー『高地ラウジツツと低地ラウジツツ

のソルブ民謡』第二巻、一六〇頁のソルブのテキストの中に記されており、「このテキストがライプツィヒの手書きの『ソルブ新聞』に、もともと記されたものである」という注釈が施されている。この『ソルブ新聞』には、一八二七年一月二二日に、ザイラーの手により当該メルヒエンが確かに記載されている。しかしながらそこには、このメルヒエンを寓話たらしめる教訓的な結末が欠けていた。その証拠は、ザイラーがこのメルヒエンを教訓的な結末のない形で、民衆の口から書き取ったということにある。ところが上述のテキストもまた、一八四三年という年に、シュマラーの父親が聖歌隊長として住んでいたローザの牧師であったというザイラー自身にのみ由来しうる。ザイラーは、シュマラーの歌謡とメルヒエンの収集に、極めて活発に参加していた。したがって、この教訓的な結末が、ザイラー自身によって加筆されたものであることは間違いない。」

このテキストについてはグリムが、『子どもと家

庭のメルヒエン集』第三巻注釈書の KHM18 「藁と炭と空豆」の注釈において示唆している。デーハルトは「比較伝説研究への寄稿論文」(『民俗学協会誌』、一九〇七年、一二九・一三三頁)において、教訓的な結末が後の加筆であるとは認めていない。そして彼は、より後世のものである空豆の縫合線の原因譚というグリムの当該メルヒエンよりも、ソルブのメルヒエンの方が、極めて古代的な印象を与えることを証明している。デーハルトは、ロシアの類話「泡と藁と木の皮の靴」を最も古い類話と見なし、ソルブのこのメルヒエンの方が、グリムの空豆の縫合線の原因譚よりも古いという説の後押しをさせている。というのも、ロシアのテキストには、啞然とさせるほどのユーモアが、より強烈に表現されているからである。

我々ソルブの比較対照全地域においては、スロヴァキアの類話「泡と藁と炭」(ポリーフカ前掲書、第五巻、一四九頁)のみ見出すことができた。

【使用テキスト】

パウ・ネド『ソルブ民謡—概説と注釈を施した体系的文献一覽』、ドモヴィナ出版社(バウツェン)、一九五六年。Paul Nedo (Pawet Nedo): Sorbische Volksmärchen — Systematische Quellengabe mit Einführung und Anmerkungen. Budyšin-Bautzen (Domowina Verlag) 1956.

パウ・ネド『ソルブ民謡—概説と注釈を施した体系的文献一覽』に収録されているメルヒエン全八六話中、動物メルヒエンに属する第一四話から第二一話まで(九五・一〇四頁)と、同メルヒエンの注釈部(三六七・三七二頁)の翻訳を試み、「ソルブの民話(二)」(『東ドイツ文学』第六号、二〇〇四年、二二・四〇頁)の続編とした。

【主要参考文献】

学術雑誌『ソルブの母』、バウツェン(ブディシエン)、一八四八・一九三七年。Časopis Mácicy Serbskeje (Zeitschrift der „Mácica Serbska“ =

„Sorbische Mutter“). Budyšin-Bautzen 1848-1937.
 『ソルブの花』プラハのソルブ人学生組合「セル
 ボウカ」の手書雑誌。一八四六-一九二二年。
 Kwětki Serbowki (Blumen der Serbowka). Hdschr.
 Zeitschrift des sorbischen Studentenvereins
 Serbowka in Prag. 1846-1922.

娯楽文学月刊誌『ソルブのボダイジュ』『バウツ
 ヘン (ブヂェイミン)』一八七九-八一年。Lipa
 Serbska (Sorbische Linde). Belletristische Monat-
 schrift. Budyšin-Bautzen 1879-81.

『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』『バウ
 シェン (ブヂェイミン)』一八六〇-八一年。
 Kužičan, časopis za zabawu a powučenje (Der
 Lausitzer. Zeitschrift für Unterhaltung und
 Belehrung). Budyšin-Bautzen 1860-81.

『週刊新聞のための月次付録』一八五八-五九年。

Měsacny Přidawk (Monatsbeilage zur Wochen-
 zeitung). 1858-59.

『ソルブ新聞』手書、ライプツィヒ、一八二六-
 八六年。Serska Nowina (Sorbische Zeitung). Hand-
 schriftlich. Leipzig 1826-1886.

『週刊新聞』『バウツェン (ブヂェイミン)』一八四
 三年-五二年。Tydženska Nowina (Wochen-
 zeitung). Budyšin-Bautzen 1843-53.

A・アールネ／S・トンプソン『民話の語型 (タ
 イプ)』FHC第一八四号、ヘルミンギ、一九
 六四年。A. Aarne/S. Thompson: The Types of the
 Folktale. (FPC. 184). Helsinki 1964.

J・ボルテ／G・ボリーフカ『グリム兄弟『子供
 と家庭のためのメルヒェン集』注釈書』全五
 巻、ライプツィヒ、一九一三-三二年。J. Bolte/
 G. Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und

Haus-märchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Leipzig
 1913-32.

Neudruck des zwei-bändigen Werkes a. d. J. 1841
 bzw. 1843.

A・エンゲリエン／W・ラーン『マルク＝ブラン
 デンブルクの民衆のこぼは』第一巻、ベルリ
 ン、一八六八年。A. Engelen und W. Lahm: Der
 Volksmund in der Mark Brabdeburg. 1. Teil.
 Berlin 1868.

U・ヤーン『ボンメルンとリュウゲンの民間伝説』
 第一部、ノルデン、ライプツィヒ、一八九一年。
 U. Jahn: Volksmärchen aus Pommern und Rügen. 1.
 Teil. Norden und Leipzig 1891.

K・ハウプト『ラウジッツの伝説本』第一巻、第
 二巻、ライプツィヒ、一八六二年-一八六三年。
 K. Haupt: Sagenbuch der Lausitz. Bd I und II.
 Leipzig 1862-1863.

H・ヨルダン『最も美しいメルヒェン集』、ホイア
 ースヴェルダ(ヴォイエレッツィ)、一八七六年。
 H. Jordan: Najpijše ludowe bajki. 1. zešiwk (Die
 schönsten Volksmärchen. 1. Heft). Wojerecy-
 Hoyerswerda 1876.

L・ハウプト／J・E・シユマーラー『高地ラウ
 ジッツと低地ラウジッツのソルブ民謡』、ベル
 リン、一九五三年。転写製版法による一八四一
 年と一八四三年の二巻本の復刻。L. Haupt und
 L. E. Schmalzer: Volkslieder der Sorben in der Ober-
 und Niederlausitz. Berlin 1953. Anastatischer

J・クジジャンフスキ『体系的に配置されたポ
 ーランド民話』第一巻「動物メルヒェン」、ワ
 ルシャワ、一九四七年。第二巻「魔法メルヒ
 ェン」、ワルシャワ、一九四七年。J. Krzyżanowski:
 Polska bajka ludowa w układzie systematycznym
 (Das polnische Volksmärchen in systematischer

Anordnung). 1. Bajka zwierzęca (Das Tiermärchen) Warszawa 1947; 2. Baśń magiczna (Das Zauber-märchen) Warszawa 1947.

M・ナウカ『伝説とメルヒェンと物語—ソルブ民族の宝』第一号、*ハウツェン* (ブライシムン) 一九一四年。M. Nawka: Bajki, bajki a basnički. Serbske narodne. 1. zešivk (Sagen, Märchen und Erzählungen. Sorbisches Volksgut. 1. Heft). Budyšin-Bautzen 1914.

J・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』全5巻、*トルティン* 1923-1931年。J. Polivka: Súpis slovenských rozprávok (Sammlung der slowakischen Volksmärchen). 5 Bde. T. Sv. Martin 1923-1931.

A・ラズナウ『ヴェント人のオリジナル・メルヒェン』、E・キエーン『シユプレーの森とそこに住む人たち』、*コトブス* 一八八九年。A.

Rabenau: Originalm ä rchen der Wenden. In: E. Kuhn: Der Spreewald und seine Bewohner. Cottbus 1889.

W・フォン・シユレーンブルク『シユプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風習』、*ライプツィヒ* 一八八〇年。W. v. Schulenberg: Wendische Volks-sagen und Gebräuche aus dem Spreewald. Leipzig 1880.

W・フォン・シユレーンブルク『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』、*ベルリン* 一八八〇年。W. v. Schulenberg: Wendisches Volksthum in Sage, Brauch und Sitte. Berlin 1882.

J・シユウチック『メルヒェンと説話—「セルボウカ」記念号』第三巻、*ハウツェン* (ブライシムン) 一八九九年。J. Šewčík: Bajki a basnički. Jubilejné spisy Serbowki. III. zešivk (Märchen und Erzählungen. Jubiläumsschriften der Serbowka.

Bd. III.). Budyšin-Bautzen 1899.

W・E・ポイケルト『シユレージエン地方のドイツ・メルヒェン』、『シユレージエンの民俗』第四巻、*ブレスラウ* 一九三二年。W. E. Peuckert: Schlesiens detusche Märchen. In: Schlesisches Volksthum. Bd. 4. Breslau 1932.

E・フェッケンシユテット『ヴェントの伝説』メルヒェンそして迷信的風習』、*グラーツ* 一八八〇年。E. Veckenstedt: Wendische Sagen, Märchen und Abergläubische Gebräuche. Graz 1880.

【追記】

本稿における、特にポーランド語の和訳に際しては、上智大学の木村護郎クリストフ先生にご教示いただいた。この場を借りて、心より御礼申し上げます。なお、本稿の文責は、翻訳者にあることを付言しておく。